



基本的感情の数について

宇津木, 成介

(Citation)

国際文化学研究 : 神戸大学大学院国際文化学研究科紀要, 29:73-91

(Issue Date)

2007-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000849>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000849>



基本的感情の数について

宇津木 成 介

はじめに

感情の数を勘定すると幾つになるだろうかという、やや奇妙な視点から感情・情動という心理学上の概念について考えてみる。目的は、感情語を枚挙することではなく、いわゆる「基本的感情・情動」の数はどのように算定されているか（来たか）について概略のイメージを作ることである。

日本の心理学用語における感情と情動は、英語の *feeling* と *emotion* の訳語である。*emotion* のほうは、すこし昔の心理学の教科書では情緒と訳されていた。心理学の初等教科書で感情と情動を区別するとすれば、情動はやや急激な身体的変化を伴う強い感情であるというような説明がなされるかもしれない。感情と訳しうる英語の単語には、*feeling* のほかに *sentiment* とか *mood* のような単語がある。これらは *emotion* に比べると強度の点で弱いけれども、ある程度長続きする「心の状態」について使用される。しかしここでは感情も情動もひとくくりにして考えることにする。

日本で用いられている心理学用語は翻訳語である場合が多いが、それが学術用語である場合には定義することによって意味を限定することができる。しかし、感情語はまず日常語として使用されているから、たとえ心理学の教科書に書かれていることであっても、そこに表れている感情語（の翻訳語）の適切性は保証できない。したがって、言語（単語）レベルで感情の数を数えるという試みは感情研究の方法として非常に適切であるとは言えないかもしれないが、それでも、弁別可能な感情体験があれば、それに対応する感情語が使われることになると考えてもよいであろう。幸い、豊かな語彙をもつ言語体系同士であれば、例外があるにせよ、たいがいの単語や表現は翻訳が可能であるように思える。

基本的な感情と日常語

1905年に出版された Hepburn (ヘボン) の和英—英和辞典 (1905) の英和の部で emotion を引くと、「七情」「情緒 (じょうしょ)」と出ている。「七情」という言葉は、最近の日本語の日常語彙からは失われているかもしれない。広辞苑 (第5版) によれば、七情とは、仏教では「喜怒哀楽愛悪欲」であるが、礼記では「楽」のかわりに「懼」が用いられている。日本国語大辞典 (小学館, 1981) によれば、他にも「喜怒憂思悲恐驚」や、「喜怒愛苦相悪欲」などが用いられているという。ヘボンの辞書の和英の部で “jyo” (情) の項を見ると、七情として、joy, anger, sorrow, pleasure, love, hatred, desire の7つが挙げられている。これは上述の仏教バージョンに相当すると言えるだろう。よく使われる「喜怒哀楽」は4つの基本的感情を表していると考えられるが、この4つに好き嫌い欲しいの3つを加えたものが七情ということになる。

多くの感情は特定の原因によって生じるが、そのうち自分自身の状態である感情 (怒りと悲しみ) と特定の外的原因 (物、人、出来事) に対する評価的なもの (七情で言えば愛と悪: 好き、嫌い) とを区別することができる。「欲 (ほしい)」は現代の心理学では感情としてではなく動機 (欲求) として扱われることが多いが、動機と情動をどう区別するかについてはそれほどはっきりした基準はみあたらない。七情のうち「喜」と「楽」が残ったが、この2つの区別は日本語ではやや曖昧である。以前、中国福建省の公園で喜怒哀楽をあらわした像を見たことがある。どちらが喜でどちらが楽かは直ちには判然としなかったが、一方は目を閉じて微笑しており、他方は口をあけて笑っていた。おそらくは微笑しているほうが「喜」で口をあけて笑っているほうが「楽」であろうと私には思われたが、学生の多くは逆の印象を持っているようだった。

そのように考える根拠としては、バツハの “Jesu, Joy of Man’s Desiring” が「主よ、人の望みの喜びよ」と訳されること、また賛美歌に “Joy to the World” (もろびとこぞりて) があることがあげられる。神とともにある快は、たとえ非常に強い快であっても、口をあけて笑うような快ではないと思われるからである。

日本語には「悲喜こもごも」あるいは、「苦楽をともにする」など、対にして用いられる感情語がある。苦と楽をペアにする発想は英語の *pleasure and pain* と同じである。「泣いても笑っても」という表現もあるが、これは感情そのものではなく、感情をあらわす行動（表出行動）について述べている。「泣き」のほうは悲しみや苦痛であろうし、「笑い」は喜び、または楽しみのどちらにも当てはまる。したがって、悲喜あるいは快苦に対応する表現であると考えられる。他者を対象にした感情表現として「可愛さあまって憎さ百倍」という表現がある。愛と憎悪は対比されるものであろう。これは英語の “*love and hatred*” あるいはドイツ語の “*Liebe und Hass*” とも対応している。これだけでは証拠として不十分であるかもしれないが、先に述べたように、豊かな語彙をもつ言語体系同士であれば、たいがいの単語や表現は翻訳が可能であると考えることにしよう。

心理学における感情語

・ジェームズの場合

筆者は少し前からウィリアム・ジェームズ (James, W.) の情動理論について調べているので (宇津木、2007a, 2007b, 2007c)、彼の1884年の論文から話をはじめることにしてしよう。この論文の中で、ジェームズは「私がここで取り扱おうとしている情動は、明白な身体表出をもつ情動だけであるということだ」と述べ、次いでそのような身体的動揺を伴う場合として、「驚き、好奇心、歓喜、恐怖、怒り、官能的 (性的) 欲望、どん欲、そのほか (*surprise, curiosity, rapture, fear, anger, lust, greed, and the like*)」を「標準的な情動」として挙げている (James, 1884. p.189)。一方、彼の心理学の教科書 (James, 1892, 2001) では、「怒り、恐怖、愛、憎しみ、喜び、悲しみ、恥、自尊、それらの変化したもの (*anger, fear, love, hate, joy, grief, shame, pride, and their varieties*)」を「粗大な情動」としている (p.241)。「そのほか」と「それらの変化したもの」ではかなり意味が違うから、やや揚げ足取りになるかもしれないが、「標準的な情動」7つと「粗大な情動」8つの間で、共通してい

るのは anger と fear だけである。lust と love、rapture と joy が同義だとしても、残された “surprise, curiosity, greed” と “hate, grief, shame, pride” の間には類似点はなさそうである。現代の心理学の教科書を読んでいる人であれば、「1892年の教科書のリストのほうが見なれた感じがしますね、でも1884年のリストにある驚きが1892年のほうにないのは不思議ですね」と言うかもしれない。

1892年の教科書の節のタイトルは、「情動の多様性には限りがない (the varieties of emotion are innumerable)^(注2)」である。ジェームズは、情動を言語的説明によって区別していくと際限がないので、「情動」を上位概念とし、個々の情動はその下位概念であるとして「数を数えるのを止めよう」と提案する。「金のタマゴを生むガチョウがすでに生んだ個々の金の卵について記述することは些細なことであるから、ここでは情動の感覚がどうして生まれるのかについて、一般的なことを考えてみよう (p. 242)」^(注3) というのである。

・ダーウィンの場合

ジェームズはあちこちでダーウィン (Darwin, C.) を引用しているが、ダーウィン自身は感情や情動についてどのように考えていたのだろうか。Darwin の *The expression of the emotions in man and animals* (1889) (浜中訳、1931, 2007) では、第6章以下第13章までの人間の表情に関する章のタイトル中に、苦悩、涕泣、気鬱、心配、悲哀、落胆、絶望、喜悅、上機嫌、情愛、やさしさ、帰依、反省、瞑想、不機嫌、不平さ、決意、憎悪、憤怒、侮慢、軽蔑、嫌悪、罪過、高慢、無力、堪忍、肯定、否定、驚き、驚愕、恐怖、震駭、自己注意、愧 (はぢ)、羞 (はにかみ)、謙退、赤面の37の語が挙げられている。少なくとも日本語の訳語においては、このリストに挙げられている単語には「心の働き」と「身体変化」の両者が混在しているように見受けられる。それにしても、37もの情動あるいは表出行動の枚挙は、たしかに「少ない」とは言いにくい。6章から13章までの各章にある情動はそれぞれまとまりをもっているとも見えないから、情動には8つのグループがあるとダーウィンが考えていたとは

言えないだろう。

・連続体理論

「次元」による説明は、感情が多種多様であることを容易に説明する。その典型はヴントの感情の3次元説である。^(注5)これは色彩感覚が色相、彩度、明度の3つの次元で説明されることと似ている。実際、後述するように、プルチック(Plutchik, R)は「色立体」を模した感情のモデルを作っている。次元の説明では、感情にせよ情動にせよ、連続体であるから、三次元空間上の特定の領域に特別な意味や意義があるわけではない。もちろん、特定の領域を他の領域から区別するために、その領域に名前をつけることはできる。たとえば色立体上のある領域には「赤」、他の領域には「緑」と名前をつけることができるように、感情立体の特定の領域に「悲しみ」とか「怒り」のような名前をつけることができる。しかし感情の場合、このような区別は「便利」かもしれないが、意味があるかどうかについてはわからない。色彩の場合には、物理的には連続体であっても、我々はおそらくコミュニケーションの便宜上、色を個別的に認識している。36色のクレヨンと12色のクレヨンとを比べると、前者のほうが絵を描く道具としては優れているかもしれないが、たいていの場合は後者で間に合うだろう。さらに人間の色覚特性のせいで、絵の具の赤黄青の「三原色」の混色によってほとんどの色を作ることができるから、「三原色」はたしかに「基本」であるということが出来る(赤と黄色の混色でオレンジ色が、赤と青の混色で紫が、青と黄色の混色で緑ができる。しかし、オレンジ、紫、緑の絵の具の混色から赤、黄、青をつくることはできない)。つまり特定の色は他の色より重要であると言える。

基本的な感情は幾つあるのですかという問いに連続体理論を当てはめると、「怒り」と「悲しみ」をまぜると「喜び」になりますというような混色現象があればともかく、そうでないとすれば、原色に相当する「基本感情」は「ない」ということになる。

この問題についてプルチックは、原色に相当する基本感情が「ある」と考

えている。彼によれば、1) 少数の純粹な、あるいは基本的な情動が存在する、2) その他の情動は基本的情動から合成される、3) 基本的情動は相互に生理的にも行動的にも異なっている、4) 基本的情動は仮説されたものであってそのままのかたちで存在しているものではない、5) 基本的情動は正反対の極をもつ複数の対として考えられる、6) どの情動も様々な強さのものがある、という仮説を提出している (Plutchik, 1962 p. 42)。彼によれば基本情動は受容、驚き、恐怖、悲しみ、嫌悪、予期、怒り、喜びの8つであって円環構造を持ち、受容と嫌悪、驚きと予期、恐怖と怒り、悲しみと喜びがそれぞれ対をなしている。彼はまた、怒りと喜びの加算によって高慢 (pride) が生じ、喜びと受容の加算によって愛が、受容と驚きの加算によって好奇心が、驚きと恐怖の加算によって警戒と畏怖が、恐怖と悲しみの加算によって絶望と罪悪環が、悲しみと嫌悪の加算によって苦悩、悔恨、わびしさが、嫌悪と期待によって皮肉が、そして期待と怒りの加算によって攻撃、復讐、頑迷が生まれるという。このような「混色」は隣同士の情動だけでなく一つおき、または二つおきの情動間にも成立する。例えば悲しみと怒りの加算によって妬みや拗ねが生じるという (pp. 117-118)。

プルチックの考え方は、感情をあらわす非常に多数の言葉の意味を少数の「基本的感情」の和のかたちに分解することができる可能性を示した点で興味深い。しかし彼の「色の混合と情動の混合との間に見られる並行関係 (p.vii)」の示唆にもかかわらず、色彩の場合には例えば赤から黄色に至る色相の変化は橙色を介して連続的であるのに対し、情動の場合に怒りと喜びが高慢を介して連続しているとか、あるいは嫌悪はだんだんと予期へと変化し、やがて怒りになるというようには思えないし、またプルチック自身もそのような主張をしているわけではない。だから彼が主張する8つの基本的情動は、それらが4つの対構造をもっているにせよ、「連続的な円環構造を持っている」と強く主張することはできず、むしろ非連続性の主張に近いと言ってもよさそうである。^(注6)

・ジェームズと本能

ジェームズの考え方には興味深い点と矛盾した点とを指摘することができる。つまり、情動と本能とは一つの過程がもつ2つの側面であるという主張と、本能の数は有限であるが情動は数えきれないという主張である。そして、情動は数え切れないというのは（枚挙して記述するだけでは）科学的ではないから、連続的である生理的変化によって感情の多様性を説明する必要があるという。

ジェームズの情動理論によれば、「個々の情動は生理的変化という要素の合計である」から無数の情動を分類・記述する必要はない。むしろ、「どの対象がどの反応を引き起こすか、ある対象が特定の反応を引き起こして他の反応を引き起こさないのはなぜかを問わねばならない」と言う（James, 1892, 2001; p. 248）。ジェームズは感情・情動の多様性にとらわれることなく、すべての情動に共通する事象（身体的変化の知覚）によって情動の本質を説明しようとした（James, 1892, 2001; p. 242）。つまり情動の多様性の説明要因として身体的変化の多様性を持ち出して来たのだから、彼は、「呼吸の次元」「血圧の次元」「体温の次元」などそれぞれの次元における身体変化の多様性が、情動体験の多様性の原因だと考えたのだと言ってもよいであろう。これはヴェントの次元とは異なった次元ではあるが、次元的（連続体）説明である点においては変わりがない。

しかしジェームズは一方で、情動は「本能」に対応して生じると考えていた節がある。この考え方は、のちにマクドゥーガルが立てた本能論の中で主張され、また批判もされた考え方である。これは、本能の数、（本能的）反応を引き起こす刺激の数に応じて、多数ではあるが有限個の、それぞれ特異な反応として情動があるという考え方である。^(注7)

ジェームズが情動を本能（instinct）との関わりにおいて理解していたことは、2つのことから推察できる。それは、1884年の論文における「生物の神経系は、環境の特定の様相と接触することで生じる特定の反応の集大成に他ならず、そのような反応は動物の生活環境の中で必ず遭遇する刺激に対して準備されており、その準備の中には当然、情動が数えられる」という主張（p. 190）

がなされていることと、1890年と1892年の両教科書で、記述の順序は異なるものの、情動と本能とは切り分けられないものであるとされているからである。^(注8)

ジェームズの心理学原理 (James, 1890) には「人間の特殊本能」という節があり、心理学概論 (James, 1892) には「人の本能の数」という節がある。どちらの場合もジェームズは、「Preyer 教授の説」に従って、子どもの運動を衝動的、反射的、本能的に分け、さまざまな運動 (行動) を列挙している。^(注9) ここで挙げられている本能の中には今日の考えからすれば反射と見なされるもの、またジェームズ自身も情動的とは考えていないらしいものが見いだされる。「心理学概論」に関して言えば、「模倣」からはじまって、「発声」「競争」「けんか」「恐怖」「同情」「恥じらい」「社交性」「遊び」「好奇心」「獲得欲」「狩猟」「遠慮」「愛」「養育」に至るリストの部分は今日的な意味での「情動」と関わりがありそうである。しかしジェームズがそれぞれの「本能」に情動が対応していると、積極的に述べているわけではない。

・数えられる本能と情動

本能と情動とが対応しているという考え方には魅力がある。ダーウィンの情動理論では、情動に伴って生じる表出行動は3つの原理 (有用の原理、反対の原理、直接作用の原理) によって説明されるが、そのうち「有用の原理」はもっとも理解しやすい原理である。生物が生きていく上で役に立つ行動は習慣となる。このような運動が起きる場合、また起こらないように抑制する場合、どちらの場合においても、微弱であることがあるとはいえ不随意筋の活動が生じるから、それによって心の働きの外からわかる (expressive である) というのがダーウィンの主張である (ダーウィン, 1889, 岩波文庫 p. 72)。ダーウィンは心の状態がまずあって、それが原因で行動が生じると考えているから、役に立つ行動の数だけ心の状態があるということになる。このような行動は遺伝的で生得的 (instinctive) なものになりうるとダーウィンが考えていたことは十分に考えられる。^(注10)

マクドゥーガルは、人間には14の本能があって、それぞれの本能行動に伴う

感覚が情動（の体験）であると主張しているという（大脇，1948 p.220）。しかしこの本能の数は一定していない。他の教科書、例えばHilgard's Introduction to Psychology (Atkinson, et. al., 1996) によれば、マクドゥーガルの本能の数は1908年には18である (p.338)。Psychology : A student's handbook (Eysenck, 2000) によれば1912年の時点では17であり、「その中には、食べ物を探す、性、好奇心、恐怖、親による子の保護、嫌悪、怒り、笑い、自己主張、群居性、獲得、休息、移動、援助の要請、安楽、服従、制作、がある。」という (p.132)。ボークス (Boakes, 1984) は、1908年のマクドゥーガルによれば、主要なものは闘争と恐怖、拒否と嫌悪、好奇心と驚嘆、闘争と怒り、自己卑下と服従、自己主張と得意、親の本能とやさしさの7つであり、また、情緒性のはっきりしない群居本能、獲得本能もあると記している (p.462)。

最後に、Plutchik (1962) によれば、1921年のマクドゥーガルは7つの主たる明瞭な本能とそれに対応する情動があると述べている。それらは逃走（恐怖）、反発（嫌悪）、好奇心（驚異）、闘争（怒り）、自己卑下（服従）、自己主張（高揚）、保育（親切）である。このほか5つの明瞭ではない本能があり、それらは群居、所有、構築、生殖、食欲である (p.43)。またマクドゥーガルはこれらの基本的な情動が複数集まって二次的情動をつくると言う。つまりこの場合は、多数の情動があるのは基本的な情動のクラス内の変種が多いからであるというより、混色によって新しい情動をつくることができるからであるということになるだろう。

マクドゥーガルが挙げた本能は少ない場合で7、多くてもたかだか18であるから、これくらいであれば、本能ごとに情動があると言っても、枚挙しきれないから整理する必要があるということにはならないであろう。しかし現時点では、著者はマクドゥーガルの情動理論を直接に調べるに至っていないので、ここでは彼の理論についてこれ以上は述べない。

・発達と基本的情動

これまで、基本的情動の数について検討してきたが、「基本」の意味はかな

らずしも明確ではなかった。ジェームズが粗大な情動として枚挙したものには特に根拠も述べられていないので、それらは誰でもが認める「典型的」な情動と言っていいかもしれない。そうであるとすれば、理論的根拠などなくても、出現頻度が高く、相互に区別することが容易であればよい。これに対しては、それ以上分解できず、他の情動の構成要素となる、いわば原子論的「基本」情動を考えることができる。プルチックの情動がそれに当たる。もう一つ、発達の観点から、人間の発達において最も初期に発生する、あるいは最も早期から存在が認められる情動をもって「基本」とすることもできるだろう。以下においては発達の視点から「基本」的情動の数を調べてみる。

・ワトソンが考える情動の数

ワトソン (Watson, J. B.) の情動研究はジェームズ理論への批判から始まっているところが見受けられるし、行動主義の提唱者として評価されるワトソンの情動理論は、最近ではあまり紹介されることがないと思われるから、やや詳しく述べることにする。

ワトソンは彼の「Behaviorism」(1930)の中で、「過去20年間、フロイト主義者とポスト・フロイト主義者によって情動に関する論文がたくさん書かれたけれども、行動主義者の目から見ると、まったく科学性を欠いている」と述べたあと、「われわれの多くはジェームズの情動“理論”によって育ってきているのだから、まず彼(に対する批判：筆者補)から始めよう」と書いている(p. 140)。ワトソンによれば、ジェームズが情動の心理学をつまずかせてからようやく立ち直りが始まるまでに、40年がかかったという。そして、ダーウィンにしてもランゲにしても、情動反応とそれを引き起こす刺激について客観的に調べていたのに、ジェームズはもとより、その後の生理学者も医学者も心理学者も、だれもそうしなかったという。「空虚な言葉によってジェームズは心理学からもっとも実り多く興味深い領域を奪ってしまった。ジェームズがこの情動理論の上にあぐらをかいている状態が長く続いたが、それは、彼の言説が事実上、この国のすべての指導的心理学者によって鵜呑みにされ、そして彼ら

がジェームズの言説を長年にわたって教えてきたからである (p. 142)。」これはかなり手厳しい、敵意に満ちた記述と言わなければならない。

ワトソンの情動研究と言えば、少なくとも一般向け教科書のレベルでは、幼児を対象にした恐怖条件付け（そしてその消去）の研究と、後述する3つの生得的情動の主張が知られているが、この3つは単に実験の結果そうなりましたということではなく、ワトソン自身、当初から「基本的な情動の数」になんらかの興味を持っていたように思われる。ワトソンは、「ジェームズの情動リストは、悲しみ、恐れ、怒り、愛」と述べた上で (p. 142)、マクドゥーガルの情動理論に言及し、マクドゥーガルが主張するような本能論は間違っていると言う。ワトソンは「本能」の章で次のように述べている。「こどもを観察してみれば、ジェームズの本能を大事にとっておくようなことはなにも見つからない (p. 113)」。ワトソンが本能を否定したのは、もちろん、ワトソンの機械論的（非目的論的）世界観が、どこか目的論的なにおいのする「本能」概念を拒否する傾向にあったからかもしれないが、彼は複数の生得的な反応行動が人間に備わっていることは否定していないので、彼の主張は「本能がない」というより、「本能という概念は検証する方法がない」ということであつたと言うほうが近いかもしれない。ワトソンは誕生時に備わっているものとして、くしゃみ、しゃっくりから摂食、歩行、水泳などを挙げているが、彼によればこれらもまた胎児期に子宮内で条件付けを受けているのだという（“the ceaseless stream of activity beginning when the egg is fertilized and ever becoming more complex as age increases.”^(注11)）。要するに現実に観察できる行動はもはや「本能」ではなく、なんらかの条件付けを受けているのだという。

もし情動が生得的な本能と結びついているなら、特定の刺激はいずれの（同種の）個体においても常に同一の反応を引き起こすことになるはずである。しかし実際には、同一の刺激に対して非常に多様な反応が起こる（つまり個体差が大きい）とワトソンは言う。もしも本能が（そして情動が）特定の刺激を伴う対象や事態を適切に処理するための行動であるとするならば、実際に生じる情動表出が、そのような特定の刺激からはずれて多様な刺激に対して生じたり、

特定の刺激によって生じる反応があまりにも多様であったりするはずがない。これは情動反応をダーウィンの意味で生得的なものと考え人々に対して向けられた批判と同一のものである。

ワトソンは、「本能」と言えるようなものは人間にはないが、生得的に備わっている行動の部品のようなものは存在すると考えている。ワトソンは「反応 reaction」として

- ・ accessory reactions (仕事の遂行には直接関係のない無駄な「情動的行動」)
- ・ slowed reactions (エネルギーの過多または過少によるスピードの増減)
- ・ non-reactions (paralysis)
- ・ blocked reactions
- ・ negative reactions (例えば恐怖症)
- ・ reactions not sanctioned by society (個体にとっての有用性にかかわらず社会が承認しない反応)
- ・ reactions belonging properly to other stimuli (substitute) (学習によって獲得したもの)

の7種類を上げている(網羅しているとは言っていない)。そして、「とりあえずは定義することなしに、この反応群を“情動的”と呼んでおくのがよいだろう (p. 146)」と述べている。彼は3歳児について観察をおこない、子どもの行動は「一般に情動的と呼ばれる、かんしゃく、泣く、いじめる、臆病など、役に立たない、あるいは有害な反応でいっぱいである (p. 148)」と述べている。つまり、本能的な行動であればその本能行動を生じさせる刺激事態においてその動物に利益をもたらすような行動が起こっていないならば、実際に生じている行動は役に立たない行動であるという。だからワトソンは、情動的反応は目的遂行にとって妨害要因として働くと考えていることになる。

彼は、子どもに対して「特定の刺激」を与えることで、「特定の反応」が起こるかどうかを調べた。ジェームズへの批判にもかかわらず、彼の方法論はジェー

ムズが示唆した（しかしジェームズ自身は行わなかった）、「情動反応を起こす刺激の探索」であったと言えるだろう。彼は常識に反して、暗闇や動物が乳幼児に普遍的な恐怖反応を起こさないと述べた上で、しかし、誕生の時点で、少なくとも、3種類の刺激によって喚起される3つの異なった情動反応があると述べた（p.152）。これらの反応は、大きな音、身体の拘束、身体への接触によってそれぞれ特異的かつ普遍的に生じるからである。ワトソンによれば、これらの情動反応は、「便宜上、それらを『恐怖』『激怒』『愛』と呼んでおく（For convenience we may call them “fear,” “rage,” and “love.”）。しかし普通に用いられている意味で使っているわけではない。呼吸、心拍動、把握のような、前章で述べた非学習性の反応のように考えてほしい。」「私の考えでは、すべての情動反応において、外部から観察可能な眼球、四肢、体幹の運動だけでなく、内臓系、内分泌腺の要因が支配的である。恐怖の『冷たい汗』、『破裂しそうな心臓』、無感情や悲しみの際の『垂れ下がった頭部』、『若者のあふれんばかりのよろこび』、求婚者や乙女の『ドキドキする心臓』などは単なる文学的表現ではなく、本当にあることの一部なのである。（p.165）」これはまるでジェームズが書きそうなことのように思えるのだが、ワトソンは、ある程度まで生得的に決定されている「情動的」と言ってもよい刺激-反応のペアがあって、その反応の多くは呼吸、循環器、内臓系の反応だと言うのである。従ってこれは、あるいはここまでは、ワトソンの考え方はそのきびしいジェームズ批判とは裏腹に、ジェームズやランゲの考え方と大きな違いはなさそうである。

ワトソンの「観察結果」に対しては批判があった。ここで利用した版では1930年にワトソンに対して行われた批判の紹介と、それに対するワトソンの反論とが述べられている。Dr. and Mrs. Shermanの実験によれば、これらの刺激に対する反応を映画にとって大学院生に見せ、そこに表出されている情動を答えさせたところ、その答えには非常に大きい多様性があった（ので3つの基本情動が表れているとはいえない）^(注12) ということである。それに対してワトソンは、「こういう実験には長い経験が必要だ」「私が主張したのはX、Y、Zという3種の反応がある、ということだけだ」「わたしがしたとおりにすれば、同

じ結果が得られるはずだ」という。

ワトソンは少なくともX、Y、Zという3つの異なった情動反応が、それぞれに異なる特定の刺激に対して、発達の非常に早い段階でも共通して生じるというのであるから、その名称はともかく、少なくとも情動の数は3つあって「数えられる」という主張があることがわかる。これに対する批判は、先にワトソン自身が書いているように、表出は必ずしも弁別的ではないということである。

・ブリッジスと感情の発達

少し古い心理学の教科書にはたいてい、ブリッジスによる感情の発達の図が載っている（例えば相良, 1968; 小保内, 1969）。これは生後24ヶ月の間に、11の情動が表れてくるということであるから、感情の数を数えるという目的からすれば、看過することはできない知見である^(注13)。

ブリッジスの図によれば、新生児においては当初は「興奮」しか示さない（観察者に弁別ができない）が、生後3ヶ月までにまず不快（distress）が、次いで快（delight）が弁別できるようになる。生後6ヶ月までに不快はさらに不快と怒りに分化し、怒りは怒りと嫌悪に分化し、嫌悪は嫌悪と恐怖に分化して弁別が可能になる。つまり不快な情動は4種類に分かれることになる。快は、生後12ヶ月までに、強い喜び（elation）に分化し、そこから愛情が別れる。この愛情は生後18ヶ月までに子供同士の愛情と大人への愛情に分化する。また「興奮」から嫉妬が生まれ、生後24ヶ月までに、快からは「喜び（joy）」が分化する。これで11種の情動が観察者によって区別されるということになる。これはもちろん、子供に与えられる刺激と子供自身の反応から推定されたものである。

・顔写真が表出する感情

ウッドワース（Woodworth, R.S.）は感情表出写真を用いて表情認知の実験を行った心理学者としてつとに有名であるが、彼の教科書（Woodworth and Marquis, 1949）の感情と情動の章では、感情や情動を表す単語は非常に

多いが、しかしそれらは幾つかの「クラス」に分けられると述べ、58の「単語」が pleasure, displeasure, excitement, calm, expectancy, doubt, surprise, desire, aversion, anger という11の「クラス」に分けられたという。しかし「情動の多様性」という表題の付けられている節では、恐怖 (fear)、驚き (surprise)、怒り (anger)、楽しみ (mirth or amusement)、喜び (joy)、悲しみ (grief)、性的覚醒 (sexual excitement) の7つが論じられており、先に述べられていた11のクラスとは対応していない。

・ Feleky の実験

ウッドワースは1924年の Feleky の研究を紹介し、100人に対して嫌悪 (hate) の表出を意図した1枚の表情写真を呈示したところ、35通りの回答 (4つを除いてすべて単語) が得られたこと、しかしまた回答の多くは高い類似性を持っていることについて述べている。つまり、感情語は確かに非常に多様であるが、それらは限定された数のクラスに属しているということである。「軽蔑 (contempt)」「嫌悪 (disgust)」「怒り・決意 (anger, determination)」「恐怖・苦痛 (fear, suffering)」「驚き (surprise)」「愛・幸福・陽気 (love, happiness, mirth)」の6つの感情のクラス (6 classes of emotions) に回答を分けたところ、意図された表出のクラスにほぼ対応した回答が得られた。回答が他の意図されなかったクラスにあった場合に、これを「感情のクラス同士の類似性」があったと考えれば、6つのクラスは直線的に並ぶ (Feleky のデータ) が、さらにウッドワースは軽蔑と愛・幸福・勝気とが混同されることを示唆した。つまり、6つのクラスは環状の構造を示すことになる (p.357)。これは現代の感情心理学における情動の円環構造論の嚆矢と言えるだろう。

まとめ

感情の数を勘定することからはじめて環状の (円環) 構造に言及することになった。基本的感情・情動の数はジェームズの7または8、ダーウィンの8、プルチックの8、マクドゥーガルの7~18、ワトソンの3、ブリッジエスの11、

ウッドワースの11と7で、最少がワトソンの3であり、多いほうはマクドゥーガルの18であった。散らばりは少なくないが、概ね8つほどのクラスが想定されていると考えてよさそうである。

感情の数についてはトマス・アクィナスの「怒りのなもの」「欲望的なもの」の二軸による4分類や、デカルトの「驚き」から始まる時間の経過を重視した6分類、デカルトに批判的なスピノザの「内」と「外」の違いを重視した3分類についても述べる予定であったが、歴史的に述べようとする、スピノザからジェームズまでの距離が遠すぎた。次の機会としたい。

注1：上述した sentiment はフランス語では英語の feeling に近い。sentiment の語根にあたる sense は能動的かつ知的に情報を集めてくる感じが強い(例えば sensor)。feel も(ドイツ語の fuehlen も)実際に触ってみるという能動的な語であるが、触ったあとの「感じ」は felt で受け身の「感じ」がある。英語の emotion もドイツ語の Affekt もフランス語 passion も心が動かされるという受け身の現象を指している。対象に触れることは同時に対象によって触られるということでもある。

注2：すでにここで筆者は、ジェームズが varieties と言うとき、それは彼があげた8つの(基本的)粗大情動から派生するものが数え切れないほどあると言っているのか、それとも情動それ自体が数え切れない(数えられない)ものであると考えていたのか、判断がつきかねている。1884年の論文(この論文のタイトルは“What is an emotion?”である：下線部筆者)の pdf 版の本文について単語の検索を行ったところ、“emotions” 25, “the emotion” 13, “an emotion” 4,。ただし emotion という単数形そのものの出現回数は32回。その内訳は “the emotion” 13, “the ... emotion” 2, “an emotion” 4, “a/an ... emotion” 3, “each emotion” 1, “some emotion” 1, “what emotion ...?” 1, その他 (cognition and emotion, human emotion など) 7。これらから考えると、ジェームズは「情動は数えていくと限りがないが、とにかく数えられるもの」と思っていたのだろう。

注3：ジェームズの1884、1890、1892年の著作を読むと、彼が情動は一つの「類：class」であって、怒りや悲しみなどは「種：species」であると考えていたことが推測できる。1892, p. 248 では genera (genus) という語も species の上位概念として用いられている。動物の分類学では、綱：class 目：order 科：family 属：genus 種：species 亜種：variety が用いられる。

注4：原文は suffering, weeping, low spirits, anxiety, grief, dejection,

despair, joy, high spirits, love, tender feeling, devotion, reflection, meditation, ill-temper, sulkiness, determination, hatred, anger, disdain, contempt, disgust, guilt, pride, helplessness, patience, affirmation, negation, surprise, astonishment, fear, horror, self attention, shame, shyness, modesty, blushing である。なお、訳語については漢字表記の一部を改めている。また、第11章については訳書の章見出しの最後の部分が原書とやや異なって「肯定と否定」となっている。

- 注5：筆者はヴントの心理学には全く不案内である。相良守次 心理学概論 1968年によれば、『感情といえば快—不快がその変化の基本的な方向と見られるが、80年も前にヴントは、彼の内観法によって主観的感情体験を分析し、快—不快の他に緊張—弛緩、興奮—沈静の2方向の変化があるといい、そしてこれらの3方向の変化はそれぞれ独立におこるもので、結局あらゆる感情は、この3方向の軸上の感情価の組み合わせとしてその特性が示されるものと主張したが、これが有名なヴントの感情3方向説である。』
- 注6：ただし表情写真から表出感情を同定する実験に関する限り、「基本的な感情を表出している顔から判断される感情の円環構造」は、かなり古くから認められている。
- 注7：ジェームズの「どの対象がどの反応を引き起こすのかを問う」という姿勢は、行動主義の先駆けであると読めなくもない。行動主義者の創始者であるワトソンは、あとで述べるように、ジェームズに対して非常に批判的な言説を述べているが、「どの対象がどの反応を引き起こすのかを問う」という姿勢そのものは肯定している。
- 注8：1890年の教科書の24章は本能について書かれているが、情動に関する次の25章冒頭で「本能について語るにあたっては、情動的興奮と本能とを切り離すことが不可能であった。情動的興奮は本能とともにあるからである。(In speaking of the instincts it has been impossible to keep them separate from the emotional excitements which go with them. James, 1890; p.442)」という記述がある。1892年の教科書では、本能の章が情動の章の後にきているが、情動の章の冒頭は「情動は感覚の傾向であり、本能は行為の傾向であり、……この両者を区別することは難しい (James, 1892, 2001; p.240) という。」
- 注9：細かく見るとこの2つの教科書の間には矛盾がある。例えば今日では「原始反射」として考えられている吸啜 (sucking) は、1890年の「原理」では「本能的運動」の最初に挙げられているが、1892年の「概論」では吸啜は反射運動のリスト中であって、文脈上ははっきりした区切りがなされないままに本能のリストに移行している。
- 注10：ただし、少なくとも「人及び動物の表情について」の中ではinstinctive という

単語は見られるが、索引には本能 (instinct) という言葉は出てこない。

注11 : p.138にactivity streamの絵がある。

注12 : "...any form of sudden stimulation ... produces in the young infant aimless activity of most of the musculature, accompanied by crying" (Sherman, M.C. and Sherman, I.C. The Process of Human Behavior, Norton, 1929 cited from Munn, N.L. Psychology (fifth edition) 1966 Houghton Mifflin Company, Boston pp. 209-210)

注13 : (Bridges, K.M.B. 1930) については原典にあたっていないことを付記する。

参考文献

- Atkinson, R. L., Atkinson, R. C., Smith, E. E., Bem, D. J., & Nolen-Hoeksema, S. (1996) "Hilgard's Introduction to Psychology 12th ed." Harcourt Brace College Publishers.
- Boakes, R. (1984) "From Darwin to behaviourism" Cambridge University Press.
- Darwin C. (1889, 1998) "The expression of the emotions in man and animals" ダーウィン C (1931, 2007) 「人および動物の表情について」浜中浜太郎訳 (1889年第2版に基づく) 岩波文庫 (岩波文庫の翻訳ではインデックスが省略されている。インデックスの検索については1872年に John Murray から出版された初版本を参照した)。
- Eysenck, M. W. (2000) "Psychology: A student's handbook" Psychology Press Ltd.
- Hepburn, J. C. (1905) Japanese-English and English-Japanese Dictionary 2nd ed. Z.P. Maruya & Co.
- James, W. (1884) "What is an emotion?" Mind 9, pp. 188-205.
- James, W. (1890) "The principles of psychology" Dover Publication Inc.
- James, W. (1892, 2001) "Psychology; The briefer course" Dover Publication Inc. これは生理学に関する前半の1～9章が割愛されている。割愛のない1948年版では p. 381である。
- 広辞苑 (1998) 第5版 岩波書店
- 日本国語大辞典 (1981) 第5巻 縮刷版第1版 小学館
- 小保内虎夫 (1969) 「最新心理学概論」中山書店
- 大脇義一 (1948, 1949) 「心理学概論」第20章 培風館
- Plutchik, R. (1962) "The emotions: Facts, theories, and a new model" Random House, Inc.

相良守次 (1968) 「心理学概論」岩波書店 p. 191.

宇津木成介 (2007a) 「ジェームズの感情理論：教科書にあらわれるその根拠と論理」
国際文化学研究 第27号 pp. 1-27.

宇津木成介 (2007b) 「ウィリアム・ジェームズ著『情動とは何か?』(翻訳)」近代 98
号 pp.35-68.

宇津木成介 (2007c) 「ウィリアム・ジェームズ著『情動の身体的基礎』(翻訳)」近代
99号 (投稿中)

Watson, J. B. (1930, 1967) "Behaviorism" (Revised edition) The University
of Chicago Press, Chicago & London. The new print was published
by The University of Toronto Press, Toronto.

Woodworth, R. S. and Marquis, D.G. (1947, 1949) Psychology Fifth edition
Henry Holt and Company, INC. New York.